

基幹型共同研究プロジェクト

「日本語レキシコンの音韻特性」

ピッチアクセントの多様性

窪 蘭 晴 夫

《研究の概要》

本プロジェクトは、促音とアクセントを中心に日本語の音声・音韻構造を考察し、世界の言語の中における日本語の特徴を明らかにしようとするものである。促音については、主に外来語に促音が生起する条件およびその音声学・音韻論的要因を明らかにすることにより、日本語のリズム構造、日本語話者の知覚メカニズムを解明する。この成果は、日本語教育や言語障害教育に応用することが期待できる。アクセントについては、韓国語、中国語、スワヒリ語をはじめとする他の言語との比較対照を基調に、日本語諸方言が持つ多様なアクセント体系を世界の声調、アクセント言語の中で位置づける。

- ・共同研究者 4 2名
- ・プロジェクト HP <http://www.ninjal.ac.jp/phonology/>

《主要な成果物》

- ・ Kubozono, Haruo. (ed.) (forthcoming) *Mouton Handbook of Japanese Phonetics and Phonology* (全19章), Mouton de Gruyter.
- ・ Kubozono, Haruo (ed.) 2013. Special issue on 'Japanese Geminate Obstruents', *Journal of East Asian Linguistics* 22 巻4号.
- ・ Kubozono, Haruo. (2013) *Japanese Accent. Oxford Bibliographic Online (OBO)*. Oxford University Press.
- ・ Kubozono, Haruo (ed.) 2012. Special issue on 'Varieties of pitch accent systems', *Lingua*, 122 巻13号.
- ・ 甕島方言アクセントデータベース(DVD)
- ・ Classified Bibliographies: アクセント、促音
詳細

⇒http://www.ninjal.ac.jp/phonology/05_publications/
<http://www.ninjal.ac.jp/phonology/bibliography/>

《特色ある活動》

〈国際シンポジウムの主催 (+主要テーマ) 〉

- ・ ISAT 2010 (International Symposium on Accent and Tone). 国語研, 2010年12月19日~20日。

- (1) Typology of prosodic systems
 - (2) Prosodic systems of endangered languages and dialects
- ・ GemCon 2011 (International Workshop on Geminate Consonants), 神戸大学, 2011年1月8日~9日。
 - (1) The phonetics and phonology of geminate consonants in Japanese, especially in loanwords
 - ・ ICPP 2011 (The 1st International Conference on Phonetics and Phonology). 京都大学, 2011年12月10日~14日。
 - (1) *rendaku* and voicing
 - (2) *sokuon*, or geminate consonants: special sessions on 'Cross-linguistic Studies of Geminate Consonants', 'Phonetics and Phonology of Geminate Consonants'
 - (3) accent and tone: special session on 'Loanword Prosody'
 - ・ ICPP 2013 (The 2nd International Conference on Phonetics and Phonology). 国語研, 2013年1月25日~27日。
 - (1) *rendaku* and voicing
 - (2) *sokuon*, or geminate consonants
 - (3) accent and tone: special session on 'Tonal Neutralization'
 - ・ 3rd ICPP (The 3rd International Conference on Phonetics and Phonology), 国語研, 2013年12月20日~22日。
 - (1) *rendaku* and voicing
 - (2) *sokuon*, or geminate consonants
 - (3) accent and tone: special session on 'Tonal Change'詳細 ⇒<http://www.ninjal.ac.jp/phonology/IntlConference/>

〈若手研究者育成〉

- ・ PD フェローの雇用育成 (合計3名)
- ・ 若手研究者 (大学院生等) への国際シンポジウム発表旅費支援
- ・ 若手研究者 (大学院生等) への調査旅費支援
- ・ 学術振興会特別研究員 (PD) の受入れと指導
- ・ 特別共同利用研究員の受入れと指導

《ピッチアクセントの多様性》

伝統的な音韻類型論によると日本語は「ピッチアクセント」に区分される。これは一方では語アクセントの類型(1)によるものであり、他方ではピッチ（高さ）をどのレベルで弁別的に用いるかという類型(2)による。

- (1) ピッチアクセント⇔ストレスアクセント
- (2) トーン（声調）言語⇔ピッチアクセント（語アクセント）言語⇔イントネーション言語

日本語の研究では日本語諸方言の語アクセントが「ピッチアクセント」であることは当然のこととして受け入れられているが、一般言語学からは様々な問題点が指摘されている。たとえば、同じ「ピッチアクセント」に分類される言語でも、日本語のピッチアクセントはスウェーデン語やバスク語のピッチアクセントとはかなり異なる。また日本語内部を見ても、諸方言のアクセント体系にはアフリカのトーン言語的な体系から英語のようなイントネーション言語的な体系が存在する。「ピッチアクセント（体系）」といっても、その中には様々な体系が混在しているのである。

このような状況において、「ピッチアクセント」という概念そのものを否定する考え方も登場している。たとえば Hyman (2006)は語レベルの音韻的なプロミネンスに着目し、(3)の2特徴を満たすものを「ストレス（言語）」、これらを満たさないものを「トーン（言語）」と呼ぶことを示唆している。

- (3) a. Obligatoriness (1語に必ず1つは音韻的なプロミネンスがある)
- b. Culminativity (1語には複数の音韻的なプロミネンスは存在しない)

ところが日本語諸方言を分析してみると、英語と同じように(3a,b)を満たす体系（たとえば都城方言）も、(3b)だけを満たす体系（たとえば東京方言）も、さらには(3a)も(3b)も満たさない体系（たとえば甕島方言）も存在する。また、(3a)を満たすかどうかは研究者の分析次第で決まる体系（鹿児島方言）も存在する。日本語の中に、Hymanのいう「ストレス（言語）」も「トーン（言語）」も存在しているのである(Kubozono 2012a)。

Hymanの研究と並んで興味深いのが Gussenhoven (2004)が提唱する *tonal density*（トーン指定の密度）の考え方である。これは言語をトーン、ピッチアクセント、イントネーションなどのように分類せず、ピッチが語や文の中にどのくらい密に(*densely*)指定されているかという基準で言語を記述・比較しようとするものである。中国語(北京官話)のようなアジア的なトーン

言語では音節単位でのピッチ指定が必要となるのに対し、バンツー諸語に代表されるアフリカのトーン言語では形態素レベルかそれより大きな単位での指定が必要となる。英語のようないわゆるイントネーション言語では、ピッチが文レベルで緩やかに(*sparsely*)指定されていると分析される。この考え方でいくと、日本語諸方言のピッチアクセント体系は、バンツー諸語の体系に似たものから英語の体系に似たものまで、*tonal density* という数直線上の連続体としてとらえ直すことができるようになる。これは、Uwano (1999)に提案されている日本語アクセントの類型(多型、N型、無型)や早田 (1999)が提案した類型(*word tone* 対 *word accent*)にも通じる考え方である。*Word tone*（語声調）と呼ばれる体系では語全体に対して1個ないしは複数のメロディーが付与され、一方、*word accent*（語アクセント）と呼ばれる体系では語の特定の位置（音節、モーラ）に対して音韻的なプロミネンス（アクセント）が付与される。前者では語が長くなっても対立の数は増えず、後者では語が長くなるにつれて対立の数が増える（上野氏の「N型と多型」の違いにほぼ対応する）。

この一方で、日本語の方言アクセントを詳細に見てみると、上記のような類型、分類では捉えきれないような多様性が見えてくる。日本語の諸方言は次のような点において多様性を見せ、これらの特徴がお互い独立して機能しているようなのである(Kubozono 2012b)。

- (4) a. 1語に複数のプロミネンスの山が生じる（重起伏）か否か
- b. ピッチの付与単位が音節かモーラか
- c. ピッチの上昇と下降のいずれが弁別的か
- d. 複合語アクセントが左側（語頭）要素、右側（語末）要素のいずれによって決まるか

このように見てみると、語アクセントに見られる日本語諸方言の多様性は世界の言語に類を見ないものであり、さらなる研究によって世界のプロソディー研究、言語類型論研究に大きく貢献する可能性を秘めている。

【文献】 Gussenhoven, C. 2004. *The Phonology of Tone and Intonation*. CUP; 早田輝洋 1999. 『音調のタイプロジー』大修館; Hyman, L.M., 2006. Word-prosodic typology. *Phonology* 23; Kubozono, H. 2012a. Introduction: Special issue on varieties of pitch accent systems. *Lingua* 122; Kubozono, H. 2012b. Varieties of pitch accent systems in Japanese. *Lingua* 122; Uwano, Z., 1999. Classification of Japanese accent systems. In *Proceedings of the Symposium 'Cross-Linguistic Studies on Tonal Phenomena, Tonogenesis, Typology, and Related Topics'*. Tokyo: ILCAA.